

質疑と応答

中島千恵:記録

上田：最初に鈴木先生からご発言いただく。

鈴木：今日は、先生のご講演から学びながら個人史的なアプローチで比較教育がどのような状態に今なっているかという、クロスリー先生はブリストル大学をベースにしながらかご説明くださった。それを聞きながら私は初めて1994年にヨーロッパ比較教育学会で故ラウライズ記念レクチャーというのがあり、そこで話をするように言われ、私は困りに困ったということ思い出した。1994年という今から10年ほど前で、私はまだ未熟であった。ヨーロッパというのは我々にとって光なのかそれとも幻想なのか、ヨーロッパ共同体から統合ヨーロッパへの過渡期にあったが、そこで行われている比較教育に関する議論を聞いている限り、国民国家をめぐる比較教育の思惟をどうするのかという議論がいつこうに発展していなかった。そのような状況の中、しかたがないので、光でも幻想でもないということ論じるために、私とヨーロッパを語った。しかし、それは本になった。「ヨーロッパ、様々なチャレンジ」というタイトルで掲載されてある。

歴史的に振り返ると1955年段階の比較教育論争などはとても大切である。そのときロンドンにヨーロッパ圏内から20数人の研究者が集まってエキスパート・ミーティングを開催した。これはレイモンド・リーブさんの編集でやはり本となっている。その議論は様々だったが、結局のところ比較教育はプラクティカルなものであるとか、セオレティカルなものであるとか二つの意見に分かれてしまい、結論が出なかった。

そういうことを思い出しながら、マイケルさんのご意見を伺うと、ブリッジング・カルチャーと言って、そのカルチャーの内容にはみなさんお聞きになったとおり、2つのスロットがある。2つのスロットをどのようにブリッジをかけたかということ語られた。あの説明の内容は、1955年のロンドンにおけるミーティングとそっくり同じである。そういう意味でマイケルさんの試みは新しい理論的かつ実践的なカテゴリーを作っておられるかもしれない。それで、質問として、第一に、比較教育学は教育科学に本当に寄与しているか。できるとすればどのようなものか。第二に、ダイアログに関しては、知的な共通な基盤がないところで対話ができるかと質問した。最後には、かつて教育史研究の中に子どもが少しも現れていなかったように、果たして比較教育にきちんと子どもが位置づけられているのだろうか。

クロスリー： 鈴木先生、ありがとうございます。第一のご質問からお答えする。比較教育が教育科学に貢献できるかというご質問であった。簡単な答えとしては、「yes」である。もう少し、複雑なお答えとして、では、いかにして貢献できるかということを簡潔に答えたい。

一番初めに申し上げたいことは、文脈 (context) が大切だということである。ブリストル大学の教え子たちは微笑むであろう。というのも、常に私はこのことを言っているからである。文脈が大切だということは、政策立案者や研究者たちが思っている以上に重要である。教育科学が理論や実践の進展に寄与しようとするのであれば、比較研究から学ぶべきである。コンテキストの違いにもっと注目すべきである。比較教育学はコンテキストの違いに非常に強い分野であり、多くの主流をいく研究者が頻繁にコンテキストの重要性を強調している。コンテキストは異なるフォームをとる。というのは、国によるコンテキストの違い、文化によるコンテキストの違いがある。そして同時に時代によってもコンテキストが違う。どちらにも注目している。そして、サドラーが言ったように、歴史的、社会的、政治的な非常に広い意味でのコンテキストの違い、つまり、学校以外の環境への注目ということも大事である。サドラーが 1900 年に述べているように、学校外で起きていることは、学校内で起きていることと同じくらい重要である。第一のご質問に対する締めくくりをしたい。学校以外のもの、歴史、経済、文化、言語といったものを理解することによって、教育そのものを理解することができると考えている。

もう一点、関連してお答えしたい。今日、多くの人々が、メディアだとか政策文書にも見られることであるが、ベストプラクティス、最善の実践というものを追求しようとしている。これは世界的にとっても人気のある言葉である。最善の方法があるという前提に立ち、それが見出されればみんながそれをやろうという考えが根底にある。これは何も比較的思考ではなく、一般的に言われていることである。比較研究はすべてのコンテキストのための最善の実践を探しているわけではないと思う。個人的には、私は「最善の実践」という表現はむずかしいと思い、使用しないことにしている。せいぜい「良い実践 (good practice)」という言葉を使うことにしている。というのは、「最善の実践」は唯一のモデルを見出せるかのような意味合いを持ち、困難であるが、「良い実践」は異なる形式でも複数見出すことができるからである。

以上のように二つのダイメンションから第一の質問にはお答えした。では、第二の質問にいきいたい。第二の質問は対話 (dialog) ということであったが、私たち研究者がいかに共通の目的をもって対話をするかということである。最良の引用があるのだが、プレゼンテーションの中でこれを飛ばしたので、今、申し上げる。この引用は対話と関連している。これは、カリフォルニア大学のサモッフ教授 (Samoff) の言葉であり、私は彼の言葉に同意する。

What is required is genuine dialogue among partners who not only talk but also listen and hear (Samoff 1998:24) .

サモッフ教授が述べているのは、対話というのはただ述べる、しゃべるだけではなく、相手のことを聞くことである。私はこのサモッフ教授の言葉が好きなのであるが、人はとかく話すことばかりに集中して、なかなか相手のいうことを聞こうとしない。聞いても、自分の聞きたいことだけを聞いて、全部に耳を傾けることがないからだ。第2のご質問に対するお答えだが、確かに対話は大事であるが、どちらかというと話すということだけより、聞くことも大事であるというふうに考えている。鈴木先生がおっしゃったのは、この対話が政策立案者や改革者に役立つかということであるが、こういった政策の立案者や改革者が対話をするということであるが、必要なのは、彼らが人々の話を聞くこと、特に実際に実践する人たちの言葉に耳を傾けることが大事だと考える。どんな専門的な分野があるにしても、教師、児童生徒、関わっている人たちの意見を聞くことが大切である。大切なのは、いかにそういう人々の意見を聞くかということであるが、ひとつの方法は、ナラティブ・リサーチのアプローチを活用することである。たとえば、システムの異なる立場にある、異なる人々が自分の言葉で話をする。そして彼らのストーリーが一つのテーマをめぐる対話となる。

イギリス、他の地域にも言えることであるが、統計に頼るような量的調査方法がまた活発になりつつある。量的リサーチは確かにいいと思う。すべての教育科学に貢献すると思う。しかし、非常に危険がある。量的リサーチは質的リサーチの良い面を覆い隠してしまうような力を持っている。これを *scientific paradigm* というが、質的リサーチに影を落とす。ここで締めくりたいと思うが、私が気をつけなければいけないと思っているのは、こういった量的リサーチとともに他のリサーチの方法も最大限活用し、異なる文化に橋を架けることであり、相互に影を落としあうことではない。

最後に第三の質問に対する答えであるが、これは簡潔に答えたいと思う。これは比較教育学における子どもの位置についてである。私は今まで比較教育学の分野の発展を述べてきたのだが、それはますます研究主導の分野として将来を描いてきた。こういったリサーチの領域はますます広がってきて、学校のみでなく視野が広がってきている。たとえば、アダルトエデュケーション、継続教育、コミュニティでの教育、こういったものも比較教育学のリサーチの対象に含まれてきている。こういった中で、比較教育学の分野の中で子どもの位置が見出せると思う。しかし、別の動きもある。UKでは研究者たちは、近年、「教えること」

(*teaching*) だけでなく、「学習」 (*learning*) にも関心を払ってきている。学習に焦点を当てることは、子どもに焦点を当てるすばらしい方法である。そして教育に関わる多くの人々が、主として子どものニーズに関心を示している。よって私にとって焦点はやはり子どもに

あり、そこには、様々な人々の専門性が持ち込まれ、新しく、創造的で必要とされる方法で子どもに関連する問題を研究することが必要である。

上田：鈴木先生からのご質問とそれに対するご返事だったわけだが、興味深い問題なので、フローワからもご質問をいただきたい。

安田：ピサの試験が行われ、日本の子どもたちの読解力が劣っていた。どうして読解力が劣っていたのか、それについて私どもは・・・つまり読み書きそろばんを教えているが、反対に物事を聴いて、読んで、考えて、述べるほうという後のほうだから、ピサの指摘は重要であり、賛同しているが、今、クロスリー先生が述べられた中の・・・こういう方について・・・どう考えておられるか。賛成かどうかも含めてコメントをもらえればと思う。

クロスリー：英語と日本語の両方で言っただき、考える時間をいただけた。今日、私が引用したハルーシモ・シモーラ教授のCEに掲載された論文であるが、これは洞察深く、批判的な非常にいい論文だと私は思っている。ピサと同じようにアグレッシブで攻撃的なのだが、一番最初は、彼女はフィンランドのピサにおける成績を喜んでいて、次に心配しだした。この国がいい成績を収めたということは、現存する教育が結局は将来強められるということに対する懸念が出てきた。シモーラ教授は、フィンランドの教育システムの弱点を見えなくしてしまうという風に考えた。その結果、フィンランドの教育の弱点が将来も永続的に続いていくことを心配した。フィンランドの教育の弱点は、受身的で暗記型の授業、しいては創造的で批判的思考を促進しないような教育方法である。シモーラさんが言うのは、このような弱点を隠さずに注目しつつ、良いところは強化していくということを述べていた。彼女の論文を読んでいただければ良くわかる。

中島：比較教育学に子どもがどのように位置づけられているかという鈴木先生の三番目の質問と関わってくるのだが、今は国際的にアカウンタビリティとういことが言われている。アカウンタビリティというのは、子どものアチーブメントを主に問題としている。先ほどクロスリー先生は子どものラーニングにもっと焦点が当てられるようになっているとおっしゃったが、アカウンタビリティで議論されている内容を考えてみると、それは成績だけで、ほんとうに子どもの状態が問題になっているのかという疑問に思う。むしろ、子どものデータを用いたポリシーディスカッションであるのではないかと思う。その辺のところを先生はどのように考えておられるだろうか。

クロスリー：非常に重要な質問である。今日、すべての政策のステイトメントにアカウントビリティということが含まれている。こういったアカウントビリティというものは、他のいろいろな力が加わっていると思う。私が考えるところでは、ネオリベラルのディスコースに関連づけられていると思う。Decentralization (分権化) の概念とプライバタイゼーションという二つの要因によって駆り立てられていると思う。ひとつは経済的、もうひとつはコントロールに関わることである。こういった原則をここ20年間、ネオリベラリズムがずっと引っ張ってきたと思う。マイケル・アップルは、こういった動きに対して、私たちは一丸となってチャレンジしなければならない、特に公的教育を含めた公的分野において私たちはこのような動きにチャレンジしなければならないと訴えている。さて、質問にもどって。個々の子どもたちは政策の討議の中では埋もれてしまっている。とくに財政、権力によって牽引される議論の中で、確かに個々の子どもは埋もれてしまっている。マイケル・アップルも同意すると思うが、こうしたグローバル・ポリシーの中で、確かに子どもたちが埋もれているということはいえると思う。

谷川：統計的手法も大切なのだが、それ以外の手法も大切だというご意見に共鳴する。ところが、今、日本でも世界的にもこれほど統計的な手法がもてはやされるのは、ひとつはビジブル (visible) だということだと思う。もうひとつは、ユニバーサルに価値基準を設定しやすい。それに対して、今お話になったダイアログという手法がどれほどビジブルでユニバーサルな価値基準たりうるのかということをご質問したい。

クロスリー：非常に複雑なお答えになる。ナラティブ・アプローチとか質的リサーチというものは、どれくらいユニバーサルな価値基準になりうるか。はい、なりうる。これは私がプレゼンテーションの中で申し上げていたことと一貫している。それは異なる人々によって異なるコンテキストで用いられうる、むしろプロセスとあってよい。両者の手法には違った使い方がある。確かにデータというのはいろんなものを比較したりするには役立つが、質的方法は、量的方法の背景にある問題や意味をよりローカルで文脈にセンシティブな方法で理解することを助けてくれる。こういったアプローチというのは、普遍的価値を持っていると思う。普遍的な貨幣のようなものはないかもしれないが、質的な調査というのは、ともに普遍的な価値を持っていると思う。統計的な調査においても、質的な視点を取り入れているので、そういったところは認識されるようになってきていると思う。ここで申し上げているのは、私がプレゼンテーションでお話してきた、文化の「架け橋」とつながってくると思う。質的な調査は統計というものを補足する、また、こういうデータが暗示するものを分析するのに非常に役立つと思う。ここに皮肉なことに、比較のリサーチにおいて非常に費用がかかって、そして影響力が大きかったリサーチというのは、こういった大きな国際機関が行った調査で

ある。ところが皮肉なことに、このような国際的な大調査に関わっている人たちは、すべてとは言わないが、比較に関するディズプリンをもっていない人たちが多かった。こういった調査に対する強い批評は、比較教育学会から出てきた。より多くの比較教育学者たちが統計的調査に関わっているし、統計データを解釈し、それに貢献し、挑戦している。ますます、比較教育学会からの批評が将来、役立ってくるであろう。

もうひとつ別の例を挙げたい。南アフリカ共和国というのは、しばしば、国際的調査の底辺に現れてくる。毎年、南アフリカでは、統計の結果が出るたびにそれに関わった人々はメディアでたたかれる。私は過去2～3年、こういった大規模な調査に関わっている女性と知り合った。彼女は南アフリカの人で、こういったデータが出る度に彼女は恐れており、今まで教育に携わった人達、教育システムへの信頼が批判にさらされることに関して彼女は非常に恐怖を感じている。彼女は大規模な国際的調査に対して、南アフリカ共和国の教育のどこに弱点があるのかとうことを診断する道具にはなると考えている。しかし、実際には、こういった診断をするリソースや空間が与えられているわけではない。2005年に彼女をジャーナルの論文に招待したのだが、オリンピック・リーグテーブル・モデルのこのような国際調査の使用をいかに最小限に止めるか分析している。彼女はその論文の中で、いかにこのようなデータを建設的に利用するかを述べている。これは限定的に南アフリカのことを述べているのであるが、彼女の論文は *Compare* の 2005 年の特集号で読むことができる。

小澤（周）：そういう国際的な比較ではなく、イギリス国内のリーグテーブルによって成績に良い学校と場末のあまり成績は上げてないけれど、先生達が果敢に努力している、良い教育をしている学校がある。そういったリーグテーブルによって出た結果を質的な研究で調査しているだろうか。

クロスリー：ご指摘のようにリーグテーブルはイギリスでは発表されていて、教育界に影響を与えている。これを比較研究に関連づけてお答えしたい。先ほども申し上げたように、比較教育の研究者というのは、様々な異なった分析方法をとっている。単に国別の分析だけでなく、グローバルな分析をしたり、またローカルなものを軸において分析をしたりして行っている。ここで一つ良い例がある。比較調査というのは、同じ国内、地域における達成度の良い学校とそうでない学校に関する調査に関わるようになっていく。これらの研究から多くが得られると思う。しかし、比較教育の専門分野でいうと、学校以外の要因が重要である。リーグテーブルは学校以外のことは表さない。X学校はトップであるとか、Y学校は一番底であるとか表す。しかし、良くあるのは、Y学校は貧困地域にあることである。よって、そういった説明要因を目に見えるようにすることが重要である。それは一般の人々がリーグテーブルの限界を理解するのを助けることになる。それはまた、貧しい地域の学校で働いてい

る教師やそこで勉強している生徒に対する尊敬を醸成することにもなる。考えれば考えるほど、比較教育学者達は比較研究でこのような研究をやるべきだと思う。

岡本：比較教育の研究において、ダイアログということを通じての質的な研究が必要であるということは理解した。しかしながら、具体的にご研究、パプアニューギニアとの関係がちょっと不鮮明であったので、この点を説明して頂きたい。

クロスリー：私自身の研究で説明するとしたら、パプアニューギニアで調査を行ったときに私は大学にも机を持っていたし、国家の教育行政機関でも仕事を持っていたことが、とても役立ったということから始めましょう。この二つの場という経験が、私が他の人々とダイアログをいかにするのかということを教えてくれた。つまり、学者の世界と政策の世界であった。このことなる二つの世界を行き来し、ダイアログを実践することで多くのことを学んだのである。もちろん、改革を成功させるためには、現場の声を聞くということがとても重要である。

パプアニューギニアで調査をしたいと思えば、親たちにアンケート用紙を送って、それを回収して済ませるということとは出来ない。出かけて行って、そこに住んだり、対話することで調査が出来るのだ。こういうことが参与観察や、インタビューといったスキルを身につけることが出来たと言うことだ。それによって、彼らの価値観や、物語や、権力といったようなものを理解できるのだ。

ここに二冊関連した私の本を持ってきたので、是非読んで欲しい。鈴木先生と大田先生にお渡ししておきます。

上田：方法について伺いたい。調査対象に近づいて、情報を集めるということ、ナラティブの方法が真理に到達できるということになるのか。たとえば、イギリスの学校に職員室がないのは何故か、と聞いても、「昔からそうだった」と答えられてしまえば、なにもわかったことにはならないのではないか。

クロスリー：おっしゃることはよくわかります。どんな調査方法も完全なものはありません。しかしながら、このような参与観察的方法では、できるかぎり、相手を誤解をしないように解釈をしていくという努力が必要であり、このような展開が多量の貢献をしていることは事実だと思う。これこそが「架け橋」という意味でしょう。

中島：開発に関して言えば、そこは戦場であると思われる。そのようなところで平和と教育を論じることはできるのか。

クロスリー：開発という問題は、重要な課題であると思う。たとえば、世界銀行などは、ラップトップを持ち込み、すでに決定されたプランを持ち込もうとする。しかしながら、今パプアニューギニアでは、地域の人々との協力で教育改革を進めようと奮闘している。環太平洋の住民の力を高めようとする動向はかなり明確になってきている。彼らの声を大きくしていくことと、子どもの声を周辺化しないということが可能であると信じている。彼らの声は、地域の価値観、優先順位などを示しているからである。そして彼らの声を反映するような政策を提案することを試みているのだ。だから比較研究の意味がここにあるともいえる。私は学生にそれゆえ、文脈が大切だと常に言っているのだ。

上田：時間を多少過ぎました。とても重要な議論が出来たことを嬉しく思います。
クロスリー教授、どうもありがとうございました。

(なかじま ちえ：京都文教大学)